

五十数年ぶりにウマチー綱復活

〔榎原区〕

榎原区は昨年、五十数年ぶりにウマチー綱（子ども綱）の綱曳きが復活しました。復活させようとしたきっかけや成功した秘訣はなんだっただろうか

榎原区自治会長

伊波時男さん

榎原では、戦前、ウマチー綱（子ども綱）を旧暦の六月十五日に、十日後の二十五日に大綱を引き、その間に二一七一青年綱を引いていたようです。



伊波 時男さん榎原自治会長

綱を引くというのは、まつりのフィナーレ。綱を作っている最中の親睦も大切なんです。

る限り、二十八年前にも引きました。当時、自分が青年会長だったんですが、あの頃ワラがないのでワラの代わりになるカヤを一世帯あたり十束もってきてくれるようお願いして回りました。大綱は、一九九六年にも引きましたし、二〇〇一年にもウマチー綱と一緒に引きました。大綱を引くには資金がかかるものですが、榎原では今のところ毎年引くことはできません。大綱を作るのに榎原では二週間ほどかかります。毎日、夕方七時から十時までかけて作り、十時以降は区民の交流をしています。私は綱を引くというのは最終的なまつりのフィナーレであって、綱を作っている最中の親睦も大切だと思っています。六年ぶりとか十二年ぶりに綱を作っている中で、日頃会えなくなつた区民とも「最近どう？」とか「元気だった？」というように、近況を話したり情報交換もできます。一日で作が終わらないので、昨日来れなかつた人でも今日は来て交流できる。綱が完成したら

綱打ち上げというのをやって、さらに親睦を深め、綱引き当日までの志気をさらに高めていくんです。ですから綱引きの当日、特別にビールをふるまうんです。皆さんの区民が集まってくれます。昨年、ウマチー綱を復活させたのは、区民からやってみようという意見がありましたし、自分も引いてみたかったです。予算がかかることですが、全員が賛成ということではありませんでした。榎原の場合は二十一世紀の初頭に大綱引きをやるとうと一九九六年に申し合わせをしたんです。やはり多くの区民の賛同を得られるためには時間をかけなければいけないと思います。区の中でも何かを始めようとする時、それをやりたい人は、すぐできないとやけになるんです。でも今すぐできなくても、一歩引いて待つ気持ちも大切だと思います。すぐには相手もその必要性を理解してない場合もありますから。最初は十人の賛同者も一年後は三十人、三年後は百人



50数年ぶりに復活した榎原のウマチー綱（平成13年8月4日）

になります。

榎原の綱曳きも時間をかけて、じゃあまずウマチー綱から毎年やっていますということになりました。

ウマチー綱を復活させてよかったのは子どもたちのお父さん、お母さんが行事に参加してくれるようになったこと。区民の和が広がりました。子どもたちの綱曳きへの参加を通して最近から区民になつた方々とも交流ができるようになりました。それが一番うれしかった。我々の最終目標も区民みんながいつしよになつて楽しめること、みんなが意見も言いやすく、また、協力もお願いし易いことです。



ウチマ 綱の綱曳きに子どもたちはエイサーも披露

マチー綱を引いた子どもたちが成長して二一七一綱や大綱引きができるんじゃないかと期待し

ています。

榎原では子どもエイサーも始まりました。坂田小学校で六年生が運動会にエイサーを踊るでしょ。そこでエイサーを憶えてきた子どもたちが小さい子に教えて盛んになったんですね。綱引きの時に披露しています。綱引きとエイサーは一緒にやるといいんじゃないかなという慣習的なことより、子どもたちや多くの区民に、楽しく参加してもらうことが大切だと考えています。

広報／伊波さんは伝統芸能とか年中行事というものの意義は何だと思えますか

私はひとつの歴史づくり、継承だと思っています。発展させるということを取り組んでいくなかで、地域の親睦、融和が図れる。年中行事や伝統文化がすたれていくということは、地域の結びつきが薄れていく原因になりかねません。

伝統文化、行事というのは昔から継承されてきたものだから、老若男女、誰もが楽しめるものですよ。年齢差がないわけです。みんなが一つになれるものだし、また、一つにならなければいけないものだと思います。

取材を終えて

以前から各自が自治会が伝統芸能の後継者育成に悩んでいるという話は聞いていました。三自治会合同エイサー大会の練習を取材した後、意外な疑問をもちました。それは、歴史のある自治会が後継者育成に悩んでいる一方で、若者たちがエイサーなどの新しい伝統芸能を身につけていること。これはいいことではないかと思いましたが、単に、どこどこ自治会が活動が活発と、そういうことだけではいまいかな気がしました。なぜなら後継者育成の難者になっていて、何が若者たちのエネルギーを動かしているのか、探ってみたいと思いました。これまで、いくつもの自治会の取り組みを紹介しましたが、みなさんは、どうお感じになられたでしょうか。エイサーを始め若者たちは「あもしろいかな」や「あやめい」などと歌っています。本来、伝統芸能や年中行事というのは、みんなが楽しむのと和が広がるものですよ。当たり前のごとくですが、伝統芸能を存続させるために地帯があるのではなくて、地域の融和のための伝統芸能でなくてはいいと思います。伝統を守りつづけて、その時代にあった形があってもいいのかもしれない。また、伝統文化や芸能が今でも無かった地域でも、新たに創り出すことができるのではないのでしょうか。時代の流れに任せてはダメで、今、始まったばかりの年中行事も、それ自身が新しい伝統となるわけですか。

伝統文化はひとつの歴史づくり。すたれていくことは地域の結びつきが薄れる原因になりかねません。